

国際バカロレア・ディプロマプログラム科目

「知識の理論 (TOK)」と総合的な学習の時間

大塚 恵理子

早稲田大学教育学研究科修士課程 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

E-mail: e.1_rk@toki.waseda.jp

あらまし 本報告の目的は、近年の知識基盤社会を背景に生まれた「新しい能力」観に基づいて行われている日本の学校教育について、総合的な学習の時間と国際バカロレア科目「知識の理論 (TOK)」(以下 TOK) の内容を照らし合わせながら、カリキュラム構成・評価基準・指導内容において TOK から示唆を得ることにある。総合的な学習の時間の教育目標が改訂され、学習指導要領における総則の一部から章の取り扱いはなくなったこと背景には、総合的な学習の時間で育まれようとしている能力が昨今の知識基盤社会、ひいてはグローバル人材の育成に欠かせないものとの認識が強まっていることの現れとも解釈できる。また、グローバル人材の育成に関して、2012年8月に文部科学省は国際バカロレア(以下 IB) 資格への対応を発表し、国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力会議の報告書である「国際バカロレアディプロマ・プログラム Theory of Knowledge (TOK) について」のなかで「IB の教育理念は全人教育にあり、そのカリキュラムは、学習指導要領が目指す『生きる力』の育成や、課題発見・解決能力、論理的思考やコミュニケーション能力等重要能力・スキルの確実な習得に資するものである」と述べた。総合的な学習の時間の課題となっている評価基準の設定、評価の信頼性、カリキュラムの明確化、教科との関係の整理といった点は、IB において総合的な学習の時間と近い位置として存在する TOK の①全ての教科に通底する、目に見えない“方法”“学び方”を可視化している、②一つの教科として体系的にまとめられている、③総合学習を中心とした教科横断的思考法の提示をしている、という特徴から示唆を得られると考えられる。

キーワード 国際バカロレア, 「知識の理論 (TOK)」, 総合的な学習の時間, 生きる力, メタ知識

International Baccalaureate Diploma program

“Theory of Knowledge(TOK)” and Periods for Integrated Study

Eriko OTSUKA

Waseda University 1-6-1 Nishiwaseda, shinjyuku-ku, Tokyo 169-8050 Japan

e.1_rk@toki.waseda.jp

Abstract Due to internationalization of Japanese, an urgent need to cultivate Japanese with new ability that can use metacognition has emerged and is being recognized as one of the important goal of Japanese Education. Because National syllabus for junior and senior high schools from Japan’s Ministry of Education has emphasized importance of Zest for Living and Periods for Integrated Study. Though this new ability is coming more and more important in knowledge based-society and globalization, Periods for Integrated Study has many problems, for example, there is no an appraisal standard, reliability of standard, lack of relationship with the subject and so on. On the other hand, in2012 August, Japan’s Ministry of Education made something known adoption of International Baccalaureate(IB). A principal of IB is related to Zest for Living’s vision, and the subject “Theory of Knowledge(TOK)”of IB has appraisal standard, reliability of standard, and system of metacognition. These points are to be of use as a reference.

Keyword International Baccalaureate, Theory of Knowledge (TOK), Periods for Integrated Study, power of living, metacognition

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

本報告の目的は、近年の知識基盤社会を背景に生まれた新しい能力観に基づいて行われている日本の学校教育について、総合的な学習の時間と国際バカロレア科目「Theory of Knowledge (知識の理論)」(以下 TOK)の内容を照らし合わせながら、TOK からカリキュラム構成・指導内容について示唆を得ることである。

1996年に中央教育審議会第一次答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)』のなかで登場した「生きる力」の概念は、①「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、②「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、③「たくましく生きるための健康や体力」、の三本柱で成り立っている。とくに①の「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」は、2008年に改訂された『学習指導要領』の「第5章総合的な学習の時間」なかで「(1)自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」、「(2)学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」、「(3)各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」と強調されている。また、同章第3の1の(2)に「探究的な学習」¹という言葉が、2の(2)には「問題の解決や探究活動の課程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること」等が加わった。

相次ぐ改訂のなかで総合的な学習の時間の項目が増やされたこと、そして総則ではなく独立した章の扱いになったこと背景には、総合的な学習の時間で育まれようとしている能力が昨今の知識基盤社会、ひいてはグローバル人材の育成に欠かせないものとの認識が強まっていることの現れとも解釈できる。

¹ 「探究的な学習」について、『小(中)学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』には、「探究的な学習とするためには、学習過程が以下になることが重要である。」とあり、具体的には「①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ。②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする。③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりする。④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。」とある。

また、グローバル人材の育成に関して、2012年8月に文部科学省が国際バカロレア(以下 IB)資格への対応を発表し、「IBの教育理念は全人教育にあり、そのカリキュラムは、学習指導要領が目指す「生きる力」の育成や、課題発見・解決能力、論理的思考やコミュニケーション能力等重要能力・スキルの確実な習得に資するものである」[4]と述べている。とくにIBのカリキュラムの中核を成す「知識の理論(TOK)」は、総合的な学習の時間と近い位置づけにありながらも、現在総合的な学習の時間が抱える課題に対して示唆を与え得るものである。

以下からは、近年注目されつつある「新しい能力」[6]の概念を「メタ知識」として明確化しつつ、総合的な学習の時間と国際バカロレア科目「知識の理論(TOK)」の現状をまとめる。

2. 現代に求められる「新しい能力」とは

齋藤(2005)[5]によると、知識は二重構造であり、事実や専門知識などの知識(「個別知識」と、知識に関する知識、知識の管理・操作に関する考えや方法あるいは推論のメカニズムである知識(「メタ知識」)に分けられる。つまり、一つ一つの個別知識が有効であるにも関わらず、それが状況に応じて物事の本質を読み解く手段として使われなければほとんど意味をなさないということである。ここでいう「メタ知識」とは、限られた個別的な場面に応じた個別的な方略・方法のことではなく、日常のなかで、例えば「調査研究をすること、論文や報告書を書くこと、提案すること、計画すること、設計すること、意志決定すること、プログラムを作成すること、小説を書くこと、新しいプロジェクトを立ち上げる」[5]際に必要になる考え方のことである。知識はそれそのものではなかなか有効に使うことが難しいにも関わらず、学校教育では「個別知識」に対する知識や活用方法は注目されてこなかった。これらはその後の経験から学ぶことが期待され、社会に出てからの個人の努力に任されている現状がある。

しかし、知識基盤社会といわれる近年、このような「メタ知識」を学校教育で育成しようとする意識が高まってきていることは、様々な機関が発表した今後求められる新しい能力観のなかにも如実に表れている。

(表1参照)

表1 「新しい能力」一覧

機関	名称	内容
【初等・中等教育】		

国際バカロ レア (1968)	「知識の理 論 (TOK)」	・論理的思考力 ・表現力 ・探究心や学術的思考・物 事を多用な観点から分 析する力
文部科学省 (1996)	生きる力	・問題解決の資質や能力 ・自律した、協調性のある 豊かな人間性 ・健康や体力
OECD-PISA (2001)	リテラシー	・道具を相互作用的に用い る能力 ・活用力
内閣府 (経済財政 諮問会議) (2003)	人間力	・論理的思考力、想像力な どの知的能力的要素 ・自己制御的要素
OECD- DeSeCo (2006)	キー・コン ピテンシー	・知識や情報を活用する 能力 ・人間関係形成能力 ・自律性と主体性
【高等教育・職業教育】		
経済産業省 (2006)	社会人基礎 力	・前に踏み出す力 (アクシ ョン) ・考え抜く力 (シンキング) ・チームで働く力 (チーム ワーク)
文部科学省 (2008)	学士力	・知識・理解 ・汎用的技能 ・態度・志向性 ・統合的な学習経験 ・創造的思考力

(松下.2011[6]を参考に筆者作成)

このような知識と思考の相互作用的なプロセスを指す能力は「メタ知識」と解釈できる。知識の構造化は、経験等から得られたある程度汎用性のある概念的フレームワークに沿って行われる。「メタ知識」は「個別知識」とは異なり、それ自体を明示化することが困難なため、単純に教授することは困難であるという特徴があるが、第一歩として非言語型知識を得るための思考の訓練・プロセスを体系的にフレームワークとして示す必要があると考えられる。

1996年に提唱された「生きる力」を育む授業として注目された総合的な学習の時間だが、指導要領の改訂の背景にはいくつかの問題点が挙げられる。以下では総合的な学習の時間の目標を確認し、授業の理念の浸透・実践に関しての現状をまとめる。

3.総合的な学習の時間の現状と課題

総合的な学習の時間のねらいは冒頭に述べた(1)(2)(3)のとおりだが、文部科学省教育課程部会 生活・総合的な学習の時間専門部会(2007)[7]によると「大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況」が見られており、また「小学校と中学校とで同様の学習活動を行うなど、学校種間の取組の重複も見られる」、「総合的な学習の時間においては、教科の補充・発展学習や学校行事などと混同された実践が行われている例も見られる」とされている。現状として、総合的な学習の時間が理念として掲げているものが十分に理解されていない点と、他の教科とどのように関連づいているのかが教師自身わからないという点が挙げられる。

そのために必要な対策については、①「総合的な学習のねらいを明確化」し、「児童生徒に育てたい力(身に付けさせたい力)や学習活動の示し方について検討する」、②「関連する教科内容との整理、中学校の選択教科との関係の整理、特別活動との関係の整理」を行うとしている。その他にも③「優れた事例の情報提供」や④「コーディネートの役割を果たす人材の育成」、⑤「総合的な学習の時間の指導計画や実施状況について、点検・評価すること」[7]等を提案している。

非言語型知識の習得を得るための経験や活動が求められる総合的な学習の時間だからこそ、教科以上に明確・精緻な目標が提示される必要がある。また実践に際して理念の理解だけでなく評価の視点が曖昧であるという点も混乱を生じさせる原因であろう。確実に能力を身につけるためには、作品・レポートなどにより学習成果を可視化・自己確認させる過程を踏まえながら、教科等へのフィードバックを確実にするというステップが欠かせない。学習者が学習そのものを再発見する機会として総合的な学習の時間が機能するように、他者との共同のなかで問題解決や言語による分析・まとめ等といった学習方法の多元化・総合化が図られ、可能な限り学習者が一生涯学びつづけられるような知力の形成を促すことが望ましい。また、教師の力量を発揮する総合的な学習の時間の計画・運営は総合的な学習の時間を通じた学校教育の再検討にもつながる。惰性的・ルーチン的な教育活動からの脱却を通して、教職専門性・教科専門性へのフィードバックが可能となる。

以下からは、国際バカロレアと国際バカロレア科目「知識の理論 (TOK)」の概要を示すとともに、その特徴と課題、今後の研究の方向性をまとめる。

4.日本と国際バカロレア

私達を取り巻く社会は近年急速な勢いで多様化しており、グローバル化の過程において各国の経済は国

際化と他国との統合化を行っている。今日、ほとんどの OECD 諸国は「知識基盤社会」と称され、経済的発展や繁栄のために知識が圧倒的に重要な役割を果たしている。その結果、経済成長を左右する教育は、今では政治的な課題として取り上げられるようになった。国際的な舞台で活躍できる人材（「グローバル人材」）を育てるために、教育制度がどれほど知識基盤社会に対応できるかという点に注目が集まっている。

これに伴い、文部科学省は 2008 年 3 月に幼稚園、小学校及び中学校、2009 年 3 月に高等学校及び特別支援学校の学習指導要領を新しく改訂した。そこで重視されているのは、知・徳・体のバランスのとれた力である「生きる力を育む」という理念に基づき、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等をバランスよく伸ばしていくこととしている。

さらに特筆すべきは「グローバル人材」の育成と、そのような人材が社会で十分に活躍できるような社会の構築を目的として、2011 年 5 月に「グローバル人材育成推進会議」が内閣官房に設置されたことである。2012 年 6 月に「グローバル人材育成戦略」として、日本が育成すべきグローバル人材に必要な要素として以下が挙げられた。[8]

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

この他にも「グローバル人材」に限らず、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等が挙げられている。またグローバル人材の育成の一環として国際バカロレア（以下 IB）資格への対応が挙げられ、「高校卒業時に国際バカロレア資格を取得可能な、又はそれに準じた教育を行う学校を 5 年以内に 200 校へ増加させる。」といった項目が掲げられている。平成 24 年 8 月にとりまとめられた IB に関する報告書においては「IB の教育理念は全人教育にあり、そのカリキュラムは学習指導要領が目指す『生きる力』の育成や、課題発見・解決能力、論理的思考力やコミュニケーション能力等重要能力・スキルの確実な習得に資するもの」（国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議，2012，p.2）と表記されている。

知識の習得やそのアウトプット等、学習の表面的な要素ではなくすべての教科を学ぶ際に共通するもの

見方や考え方を提示する取り組みは、日本においては非常に新しい動きと考えられる。以下では IB の中核である「知識の理論 (Theory of Knowledge)」（以下 TOK）について概略を示す。

5. 「知識の理論 (TOK)」について

5.1. 国際バカロレア・ディプロマプログラムとは

国際バカロレア機構はインターナショナルスクールの卒業生を対象に国際的に認められる大学入学資格を与え、大学進学道を開くために 1968 年に設立された。IB には 3 歳か 19 歳の子どもの年齢に応じて、初等教育プログラム (PYP)、中等教育プログラム (MYP)、ディプロマプログラム (DP) の三つのプログラムに分けられる。2012 年 7 月の時点で IB に認定されている学校数は世界 141 カ国において約 3,400 校に上り、日本において IB・DP 認定校は 16 校、うち学校教育法第 1 条に規定されている学校は 5 校である。

今回は IB の中核を担う DP について注目する。DP は 16 歳から 19 歳までを対象としており、大学入学前の 2 年間で行われる。このプログラムに合格することで、国際的に認められる大学入学資格が取得できる。DP は総合的でバランスのとれたカリキュラムで構成されており、高度な試験と明確な評価基準によって、認定校の生徒が確実に高度な知的水準に挑戦し、多様な観点から物事をとらえるといった国際的な寛容性の育成を目指す総合教育を行う。

5.2. TOK の趣旨・目的

DP 取得のためには、①Extended Essay (EE：課題論文)、②Theory of Knowledge (TOK)、③Creativity/Action /Service (CAS：創造性・活動・奉仕) の三つの要件を満たす必要がある。なかでも DP の中核を担っているものが②Theory of Knowledge であり、日本語では「知識の理論」と訳される。TOK は学際的な観点から個々の学問分野の知識体系を吟味し、多角的な方面から思考を試みる理性的な考え方や客観的精神を養うものである。生徒がこれまでに得た知識と経験を省察することで、それらの統合をはかることが目的とされており、Ways of knowledge 「知るための方法」という構図 (図 1 参照) には学習者を中心として感情、知覚、言語、根拠という言葉が示されており、全体的な特徴としては

- ・全ての教科に通底する、目に見えない“方法”“学び方”を可視化している
- ・一つの教科として体系的にまとめられている
- ・総合学習を中心とした教科横断的思考法の提示をしている

点が挙げられる。

プログラム全体を通し、生徒に論理的思考力や表現力、さらには探究心や学術的思考、国際理解のための寛容性を育てることを重視している。DPの中核をなすTOKの学習では、単なる知識量の増大というよりは、生徒たちが様々な場面に直面した際に状況理解の指針となる考え方として、物事を多用な観点から分析する力を養うために

- 知識とはどのようなものか
- 知識を増やす方法とは
- 知識の限界とは
- 知識は誰のものなのか
- 知識の価値とは
- 知識を“持つ”又は“持たない”とはどのような意味なのか¹

といった点を考慮する。

また「TOK ダイアグラム」(図1参照)として全体的な概念が示されており、生徒の思考、疑問などがKnower(学習者)として中心に据えられており、それを取り囲むように4つのWays of knowing(知るための方法)としてEmotion(感情)、Sense perception(知覚)、言語(Language)、Reason(根拠)が記されている。またそれを包括する概念としてのAreas of knowledge(知識の領域)は、数学、自然科学、ヒューマンサイエンス、歴史、芸術、倫理が挙げられている。Ways of knowing(知るための方法)に関連する「どのようにして知るのか」とAreas of knowledge(知識の領域)に関連する「何を知るのか」は相互に関連していると考えられる。

TOK ダイアグラム

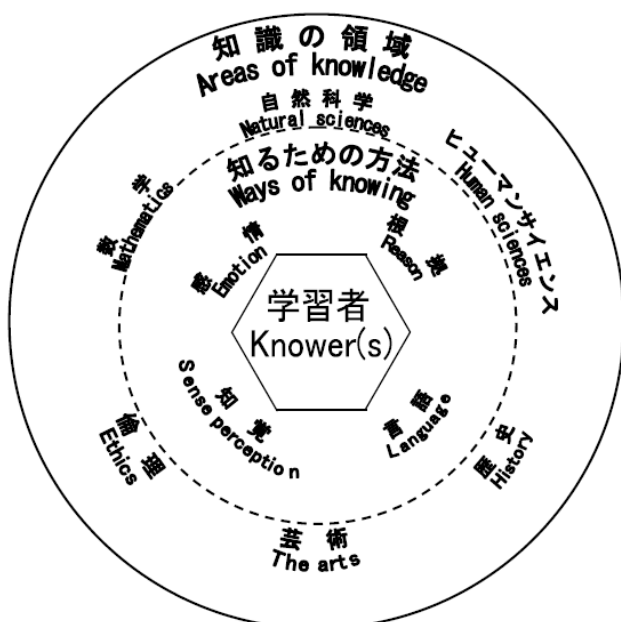


図1 (出典) 国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力会議『国際バカロレアディプロマ・プログラム Theory of Knowledge (TOK) について』 p.16, 文部科学省, 2012年8月

TOKの学習目標として、文部科学省の報告書から以下を引用する。(国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力会議、「国際バカロレアディプロマ・プログラム Theory of Knowledge (TOK) について」, pp.14,文部科学省, 2012,8.)

- 知識が示すもの、その前提にあるもの、背後にある意味などを批判的に分析する。
- 「学習者」としての生徒自身の経験や「知識の領域 (Areas of knowledge)」、「知るための方法 (Ways of knowing)」などの学習に基づいた Knowledge Issue²に関連する質問、説明、推測、仮説、仮説への反論、可能性のある解決法を導き出す。
- Knowledge Issue に対する様々な異なる考え方や認識について理解を示す。
- Knowledge Issue への様々なアプローチの仕方について関連付けや比較を行う。
- Knowledge Issue への取組みに個人的に自覚を持って対応できる能力を身に付ける。
- 学問的誠実さ、正確さに十分に配慮をしながらアイデアを練り、他者へはっきりと伝える。

5.2.TOKの指導・評価

TOKは「学習者と知ること (Knowers and knowing)」、「知るための方法 (Ways of Knowing)」、「知識の領域 (Areas of Knowledge)」によって構成され、年間で100時間の学習が必要とされる。評価は、外部評価の課題エッセイ(40ポイント)と内部評価のプレゼンテーション(20ポイント)で総合的に判断される。IBは具体的な評価基準を設定しており、それに基づいていつでも評価が為されることが原則である。所定の課題エッセイ及びプレゼンテーションに対する評価の指標として、評価基準がそれぞれA~Dまで詳細に設定されている。[9]

課題エッセイはIBによって指定される10のテーマの中から一つを選択することになる。複数の分野横断的な知識に関する疑問を投げかけるようなテーマにな

² Knowledge Issueとは、知識を獲得する、追求する、生み出す、形作る、受け入れるなど、知識との様々な関わりを通して、自分自身や周囲の人々さらにそれを取り巻く世界を理解していくうえで生じる様々な疑問のこと。「知るためには何が必要か」「それは正しいことなのだろうか」というポイントが重視される。

っている。エッセイを執筆する際の留意点、エッセイ全体に関する理解が教師によって示され、教師は生徒のエッセイ執筆に対して必要なサポートをすることが求められる。日本と大きく異なる点は、“エッセイを書くこと”が重視されるのではなく、“エッセイをどのように書くか”が重視される点である。エッセイを執筆する際の論の構成や、説得力のある根拠を示すにはどうしたら良いのかが明確に示される。

プレゼンテーションは、個人または小グループ（5名以内）でのプレゼンテーションを、1回以上行う。TOKのプレゼンテーションでは、生徒が実際の生活や身の回りの環境において、とくに関心のある事柄をKnowledge Issueとして示し、それについての探究を進める。レクチャーやスキル、シミュレーションなどの手法を用いて、ビデオ、パワーポイントなど様々な小道具を用いながら、なぜそのテーマが重要であるか、他の分野とどのような関連があるのかということについて、自分なりの考え方や経験を含めて示すことが求められる。教員の生徒の知識に関連する考えを引出し、根拠の示し方、課題の提起、視点、他の分野とのつながりについて共に考え、サポートを行うのが基本である。評価に関してはプレゼンテーション評価表で生徒自身、また教師が評価をし、その評価に至った理由を説明する。プレゼンテーションの成果を生徒・教師の双方で認識し、共通の理解を得ることが重要である。

総合的な学習の時間で指摘したように理念が十分に浸透していない点に関しては、63ページにわたる教師のためのガイド[9]が用意されている点と、IBの本部がTOKを担当する教師のために定期的にワークショップを開いているという点が参考になるであろう。また、模擬授業の事例集も発売されている他、TOKを学ぶ生徒のためのガイドも存在する。総合的な学習の時間の他の教科との関連性が薄いという点に関しては、TOKのガイドブックそれ自体に他の教科一つ一つとの関連が説明されていることと、TOKのテキストのなかで、他の教科を扱う項目が設けられているため、自然と他教科で扱うトピックをTOKでも扱うことになるのである。

5.3 課題

IB全体を通して指摘される点は、大きく分けて3点ある。一つは柔軟なカリキュラムゆえに現場の教師の力量に左右される点と、二つ目は教育課程の西欧偏重の傾向がある点、そして三つ目は多額の費用による学びの特権化である。

現場の教師の力量に左右される点は、日本の総合的な学習の時間においても同様の指摘が見受けられるが、その点に対しIBは全カリキュラムにIB本部の承認を

必要とし、加盟校とIB本部との間で相互に細かい調整が為され、年1回ないし2回、アジア地域の責任者が視察のため来校している。

西欧偏重に関しては、1982年にIBの国際会議がアジアで開かれた際に指摘された。以来アジア・アフリカの加盟校は、同地域圏の文化に関する科目を選び、その科目のシラバスを克明に作成し、IB本部に提出し、その承認を申請できるようになった。本部の承認を得れば、そのシラバスの使用が可能となる。しかしこのような道が開かれたとはいえ、西欧偏向が是正されるには依然として難しい。なぜならIBの教授言語が英語、スペイン語、フランス語であること、また学問的な思考の基礎は西欧的思考にその基礎をおいているのが現状であり、体系的学問として伝統ある西欧的思考法を超えることが難しいという点が否めないからである。

学びの特権化に関しては、未だIBという教育プログラムである商品を学校で採用するには多額の費用がかかり、それに伴い通う生徒の学費も相対的に高くなるという点である。IB校日本語教師へのインタビューによると、教師のために開かれるワークショップの参加費は、場所・科目によるもの¥50,000~¥100,000が相場であり、学校が費用を負担する場合と、教師個人が負担する場合があるという現状である。例え今後日本でIBが採用されていくにしろ、学びの特権化に拍車がかかることは避けられない。この点に関しては、アメリカの公立学校でのIB採用の事例やイギリス・ウェールズ州におけるIBのローカル化の事例が参考になると考えられる。

6.おわりに

ここまで、近年の知識基盤社会を背景に生まれた新しい能力観に基づいて行われている日本の学校教育について、総合的な学習の時間と国際バカロレア科目「知識の理論(TOK)」の内容を照らし合わせながらカリキュラム構成・指導内容に着目して考察してきた。総合的な学習の時間の課題となっているカリキュラム、評価基準、評価の信頼性、教科との関係の整理などといった点が、IBにおいて総合的な学習の時間と近い位置として存在するTOKの①全ての教科に通底する、目に見えない“方法”“学び方”を可視化している、②一つの教科として体系的にまとめられている、③総合学習を中心とした教科横断的思考法の提示をしている、という特徴から示唆を得るところは大きいと考えられる。

しかし、TOKはあくまでDPの中核であるため、初等教育プログラム(PYP)、中等教育プログラム(MYP)ではどのような位置付けになっているのかが不明確である。また、TOKを中心として実施している教科の授業等を通して、実際に生徒にどのような能力がついて

いるのか、PISAの結果とTOK実施との相関性を明確にする必要がある。この点を踏まえ、TOKの存在の有無が学力の向上にどのように関わっているのかを、実際の教師の実践やIBの教員養成を分析していくなかで調査することが今後の課題である。

文 献

- [1] 文部省 中央市議会第一次答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）』,1996.7.19
- [2] 文部省 『小学校学習指導要領』「第5章 総合的な学習の時間」,2008.
- [3] 文部省 『小（中）学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』,2008
- [4] 国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力会議,「国際バカロレアディプロマ・プログラム Theory of Knowledge (TOK) について」, 文部科学省, 2012,8.
- [5] 斉藤雄志『知識の構造化と知の戦略』, p.i, 専修大学出版社, 2005.
- [6] 松下佳代（編）,『<新しい能力>は教育を変えるか 学力・リテラシー・コンピテンシー』, ミネルヴァ書房, 2011.
- [7] 文部省教育課程部会 生活・総合的な学習の時間専門部会（第10回）,「総合的な学習の時間の現状と課題,改善の方向性（検討素案）」,2007.
- [8] グローバル人材育成推進会議,「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」,2012.6.
- [9] IBO 「Theory of knowledge guide」,pp.41,2008.